



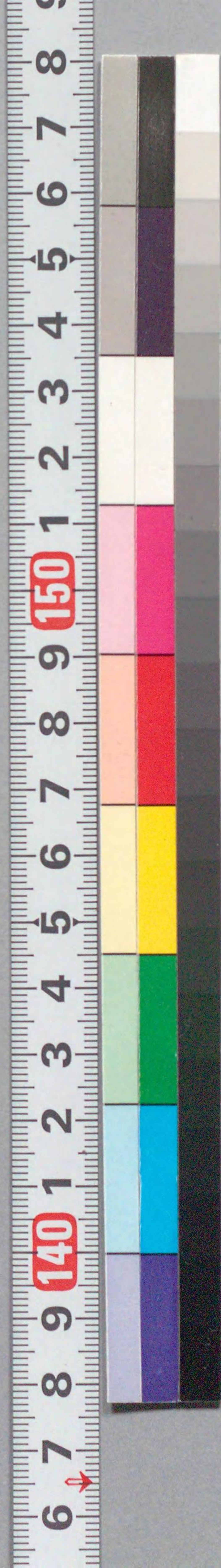
208
2
142

小説比翼文

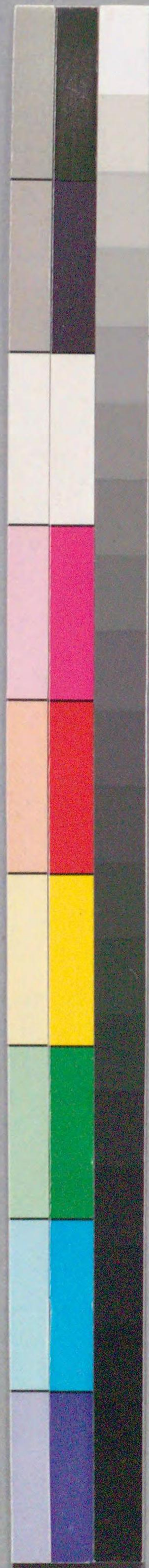
上

小説比翼文蔵

国立国会図書館 小説比翼文 2巻 208-142



ガラス使用



208
2
142

国立国会図書館 小説比翼文 2巻 208-142

ガラス使用



合 卷

小説比翼文
曲
亭馬琴子編

春肆仙鶴堂梓

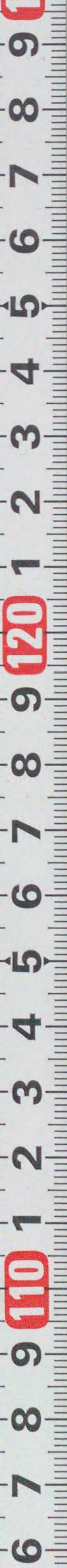


小説比翼文自叙

四思

享和三年... 杜鶴鳴... 青心... 地... 今... 彌南家... 今... 少刻

大



結せぬとよゆが戀てたの勞をさももるはべし。
そ橋てあつひつら枕しく目懸ぬ愛ごらる道の
程みふ町立出く見れば竹垣の中く掃捨を
菴あり庭の邊樓暖をまれ一本の回たら階をた
声くら世の外れ喜に怪別え人の羨しく替
一垣石見おれらうらうら二八をまれ女のそのま
唯妍小紫のいろ濃衣彼さる立出く推そと回
おれまどぐのめれと名告よ切いと改及ぬる
風流士あまうおそせま人も友得く思ふおち

あまのさあまのへいせあつとほひぬ世愛ハ席四
ゆるげう緩舟の柱をたたく馬蜂栖を得新瑞
の萱ささけく蕪葉を失ふあまハかき藤屋に
似けあ兒英少年なり深山の雪れ消中ぬ身残
くさられ竹れを捨てる人ともえを流いつた
由をあや回舎あま川筑屋あま人のと見東ま
こそといふま主人少一秘心考るまもく悟る
ゆつものさうりられおの世聖代書あもろく又ふ
水をよむわれあまの流もも卑も色よ耽て



花の秀白なりや。ちり拍子にまれ二まらよ漲おらて
より。あき舞伎の色子世小夢せしむらん。竹中在矣。
香くぬ一季初を美俵織又申以と小は若返回管は
俵若小を夫松將世孫坂回小傳次つたて。市村玉拍
山なりめん。山下巻と世袖勝流中村手孫宗井九原太
中村若くは。伊川中若美松本室巻これらハ新け若
より。や難波の芳次あやめ。階尾十次。花井あま。鈴本
辰み房が舞臺白よりある人よんせをや津の園
西鶴が遺句あも歎えせや判友是負於本とと云

くハ是よりとら。峯の小ざうが。さねくは振三より
教ゆる。鷲か鳴。東海ふその若少えさる。九近をハ
三寸み分の振袖は帯ハ蘆柄條の麻を組織中。幅ハ二
寸み分を腰とて。先ハ總をつけく。四寸むむさか
髪ハ百會けとまき。元結おれ立額髪をた右み分
女がさたのそら。肘ハ白兒。袂を眉のよは被く。是
を後みく合せ赤繪。此扇をさう挿して。かりら
れ海乃下りや。筆小かくた及下といふ。あつを。二三年
らひく。ち夫と唯と小栗の清水の辰桶と柄杓を肩



小鏡ひびく文上
ふらひ思ふ此娘を狂言のふえとせしう。古左のいひ
傳へ傳へ。いづれを今世のきこふよらふまじバ。荒の傷
なる深山末たふぐれど。そのけいけいのけれし。今に
辨し。そのいとお中くけれおのむし。兄と。たのめ。人
たれはあねど。一まむ。妓女のきこ。深し。う。たの人と
し。も。き。く。あ。り。か。る。い。び。人。と。あ。な。り。ぬ。と。い。ふ。又。彼。女
の。い。つ。た。い。い。ま。た。女。の。お。障。の。つ。と。あ。つ。た。は。病。害
び。と。あ。り。ぬ。る。身。こ。も。あ。は。わ。さ。す。も。悲。く。け。こ。も。中
ま。恨。ま。る。名。も。兒。の。葛。城。定。家。の。ら。京。よ。り。建。江

戸は揚山大坂不利生とく。才一藝をむむ。い。と。和
秀の乃。い。と。う。を。と。せ。下。菟。巾。着。の。緒。き。え。は。珊瑚。琉
珀。を。と。も。と。た。夫。と。呼。れ。あ。ら。う。後。帯。あ。ら。う。白。お。の。お。お
を。あ。ら。う。紙。と。一。葉。の。湯。十。種。香。を。嚙。と。琴。之。松。を
扱。あ。ら。う。い。と。を。通。る。態。世。乃。老。自。よ。ら。う。も。柳。の。系
葉。よ。と。あ。ら。う。も。あ。た。れ。あ。ら。う。い。と。う。を。得。た。あ。ら。う。い。と。は。残
柳。あ。ら。う。と。名。づ。け。い。と。を。後。は。投。節。と。あ。ら。う。め。て。荒。の。を。う。や
ら。う。と。や。と。い。ひ。唱。あ。ら。う。を。葉。山。か。飛。せ。し。う。ら。び。一。あ。ら。う。た
都。は。遠。く。堺。の。隆。達。り。妙。音。六。田。舎。人。は。年。を。暮。る。し。



唐の開元七年。處士盧並人。邯鄲に居りて。
 眉翁が枕を枕とす。二十年の榮枯を夢とす。と沈既濟の
 枕中記より。
 も寝るに粟粒落るるを夢とす。
 後身といふ。今又眉翁を夢とす。
 身を側と起あぐんとす。
 春の日や西よ没ぬ。

曲亭馬琴子

蓑笠隱居



小説比翼文總目錄

第一編

窮士射野雞遺禍 莫
浮屠相小兒訟命 莫

第二編

大兒威恩使惜子 莫
典寶劍右内讓祿 莫

第三編

平井本所鬪劍法 莫
吾毒森三四白冢 莫

第四編

權八怒殺助太夫 莫
過冤家助市養仇 莫

小説比翼文



比翼の良井権八

雄児任氣使聲蓋少年場
 伏劍過標院殺人都市傍



北斎辰政画

ハコク文上

小説比翼文總目錄畢

第五編

鈴木長兵衛救行客
 假女子典身挑濃紫

第六編

幡隨黑夜試義
 男女決死奔淺第

第七編

棄妻携奴暗遭殃
 兩墳合石名比翼

紫むらさ濃こ女ご妓ぎ

當年稱紫
妖ま狐こ怪かい三德
不ど
空身死負



小説比翼文上卷

東都

曲亭馬琴著編

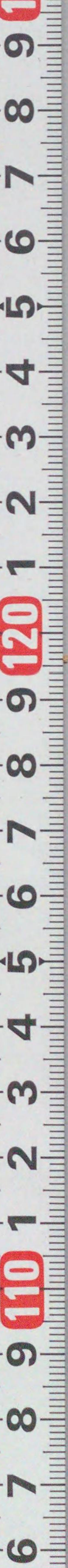
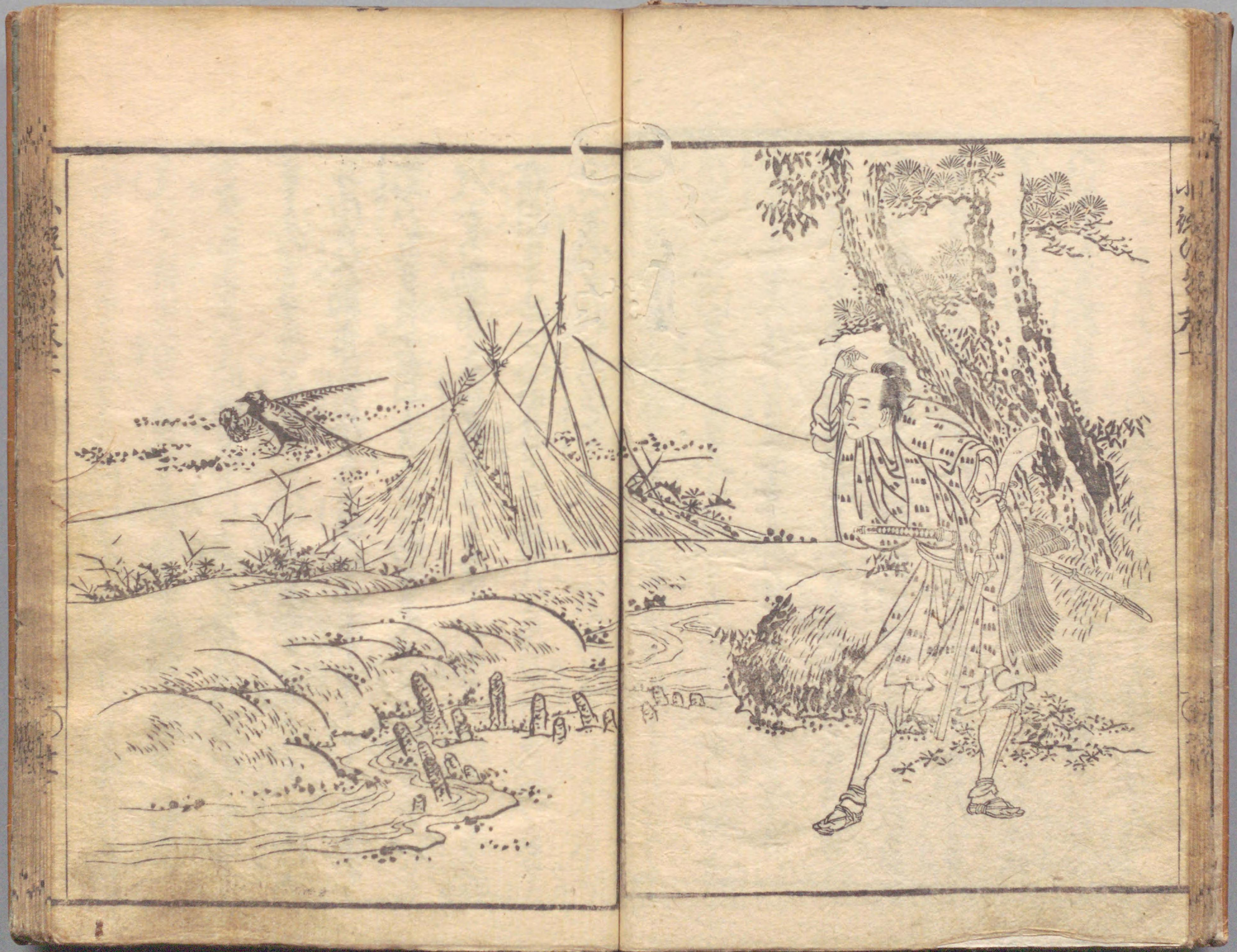
第一編

むらさき濃女
ひらり衣苑國首飾郡。平井村の郷士平井右内と
いふのあり。その先祖をきくねる。一條天皇の御宇。氏畧
の達人とゆえ。丹後守平井保昌の後裔。不_レて。父祖
ハ安房比里見義弘。弘子つぐ。つぐが義弘滅亡のち。板倉平井
村に隠居。軍学劔術を教て。生計とせり。今の右内



小治政の事
 ありても父祖の業をうけつたてぬ法を指南と右
 内の人とあり廉直して居るついでにその技を
 考るといふも門人せうなく。その家極めて貧窮あり。
 年々その時をこのまゝに置かざらば一日稚子を
 うちてその首小中より一がりの首を義のまゝ入
 久これこそ索まるといふ。明日又お尋ねあるまゝの
 うちをえたりは稚子さのふらふら一稚子を首を
 小かやりの右内はまをそとく大お惚愧し夫稚ハ守
 節の鳥あり。嗚呼悲會も母夫ぬいせの恩を新練を
 人ごうとみせしむるもあゝ生るを教へてな。いとせしこと
 積西の天理をまじり。信下と忽地感懐して終不
 教をそとえたりける。又お尋ね郡あり本所の里よ本所
 助を夫といふれあり。これもその先祖八平井氏あり。其
 右内が親族あり彼が父祖ハ徳州の千景守胤他家
 長ありしが石原の城没落のち。これも本所の
 了く奴術を指南し。今の助を夫といふも。既不三伏
 の口士あり。柞木夫久の人と云ふ奸倭邪智あり。世
 あり。あをりくその故ハ右内小芥といふ。世に彼が





倭辨子迷されく。その門下に属する人多うけ色バ
 年よりたより聞られて家出する時めた。助を夫
 が身助市への性質見よ似て右内ハ叔術より遠く
 昔のころの筆法ハ仇と本文少くは學ぶ。自述極り
 ら所ハ助市初見より右内ハ筆學して父のどく
 夥ひくまぶ。右内もくめて助を夫が好倭をあきびと
 之ども助市が左実たきよめで一家の好を中へ
 右内より二人あり見を授八といひ妹をおつまき
 ぶ。その身おたはよきまきといふども顔色おのどく。匠
 中の笑せかともいふ。その右内ハ妻の役才なり
 ける男ハ西村保平といふ浪人あり月見流泉寺に
 門弟よりさるる家居して夫婦住たり。その子の
 ありてを歎け宝塔寺に稚子の信より一人
 の女児をさうけ。その名をさき下と名づく。種をたかひ
 たり。女児さき下はなりける。其母持病の積聚。流患
 て身おりのぬ保平の身一つおさる。子をさき下
 へ艱難いづもあき。右内ハ此を佛人ゆめ
 あり。目保平が辨由たしく。其下の子をさきも

小説の巻末

十一

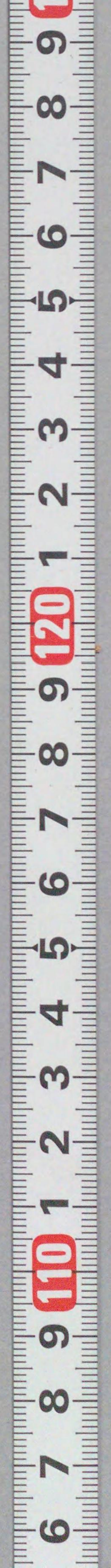


といふ。かたは志く稚兒をり育人と。まづづよ附
 くまうづー。まづのまづづーが家極めくまづーと
 しども只下の艱難えまよあひでけううおまを
 どりて養育一。かゝるものちの孩児授ハは妻下。
 めとこれまほまらづ兒やといふ保平これをゆて大お
 ろるび。びあや一貴一機おづやをえまといと貧乏
 居く多きを禱をば定躬し後人の信をまると足
 下けるまらう。とまれりくまをよたよまらひあま
 下といひ。あまは終く右内ハ方の目おまを抱兒を教





小説比翼文上



小。是かり初はつの工たくらふらあらむと近ちか死しりりに宮居みやゐ一
 ありあひ平井ひらゐ親喜ちか天あまの菴あん主ぬしハトハト並なら鏡かがみ相あひの樹ゆゑ不通とふとト
 て。より人の禍わざはひ福ふくを志こころ免ゆるしむふとさく。そやあれま速はや
 くとその吉凶きこくを問とふと薦すすめば右内みぎうちはあむとさうあつた
 翌日あした親喜ちか天あまの菴あん主ぬしを請こころトトて子こ孫そ未まが姻縁いんゑんの吉凶きこく成な
 同どうバ菴あん主ぬしをあらら相あひトト云い男子おとこハ子この年とし成なりの日ひ小こ生な
 社やしろ々々金かね程ほどあり又また女子おんなハ夫おとこの年とし年としの日ひ生なれて火ひ性せい
 なり。夫おとこ火ひハ金かねを射くし又また火ひハ戌いぬノ衰かろふ子こハ正ただ北きたハ一
 て陰かげあり。こをあ四よ神かみ小こ配あはは北きた方かた云い水みづ小こ象さる。
 年としハ正ただ南みなみハ一いち陽やうあり。これを四よ神かみ小こ配あはは南みなみ方かた象さ
 菴あん火ひノ衰かろる陰かげ陽やう敵たてして水みづハ火ひを射くと。これハ大おほ凶きなり。
 此こを妻め人ひとトト云いよりはるる彼かの氣きハ子こノ牙はして相あひあり
 ともとらいともの後のちハ都みやこて睡あむむトト云いハ金かねハ火ひノ射く
 せしとるる。銅どう鏡かがみ鏡かがみのたたむむ。その火ひノ入いりてかを
 せらるるとらいともの悪わるいをめめして形かたちをあららむる也なり。これ
 次つぎ妻めとと死しハ睡あむむして逸あはは相あひ教しをあららむる也なり。其その年とし成なりは
 ありありとらいともの南みなみ方かたハ終つひるる也なり。此この禍わざはひ一いち朝あさのつくくふふとらいとも
 下したとらいともの時ときハ陰かげ極ごくをあららむる也なり。其その後のちハ今いまノ小こ見み小



羅^く羅^く羅^くぬ^くう^く心^く子^く秘^くして^く使^くを^く修^くし^く其^くの^く禍^くを^く獲^くて^くと^くる^く
 去^くを^く統^く未^く未^くを^く示^くと^く害^くの^くれ^くは^く意^くと^く致^くと^くく^くあれ^くど^く
 右^く内^く夫^くめ^くた^くま^くか^くら^くれ^くる^く厚^くく^く唐^く王^くに^く礼^く謝^くし^くつ^くく^く
 禍^くの^く係^くる^くと^くら^くを^く考^くは^くバ^くむ^くり^く唯^く唯^くの^く雉^く子^くを^くあ^くら^く
 せ^くと^くま^くら^くく^く子^く佐^く不^くが^くあ^くむ^くら^くり^く彼^くが^く名^くを^くお^く雉^く子^く
 と^くい^くひ^く生^くま^くり^く日^く又^く年^くあり^く年^くハ^く南^く方^く朱^く菴^くあ^くら^くく^く朱^く
 菴^くも^く又^くあ^くれ^く雉^く子^くなり^く嘗^く聞^くひ^くふ^く一^く周^くの^く厲^く王^く褒^く
 城^くの^く神^くを^く走^くせ^くく^く禍^くを^く送^くし^く幽^く王^くの^く使^く不^く以^くき^くり^くて^く
 褒^く城^くが^くあ^くら^くに^く国^くを^くほ^くろ^くぶ^くは^くと^くり^くや^く今^くの^くお^くた^くは^くく^く家^くの^く
 褒^く城^くが^くあ^くら^くん^くと^く舌^くを^くあ^くら^くく^くあ^くれ^くが^く女^く見^くあ^くら^くま^くも^く又^く雉^く子^く
 の^く後^く身^くあ^くら^くて^く其^くの^く終^くと^くら^くか^くの^く雉^く子^くの^くあ^くれ^くと^くく^くあ^くら^く
 せ^くと^くま^くら^くく^くあ^くら^くけ^くは^く新^くと^く右^く内^くハ^く次^くの^く日^くお^くた^くは^くせ^くれ^く
 て^く日^く見^くあ^くら^くま^くり^く保^く平^くは^くあ^くひ^くく^くあ^くら^くけ^くは^くか^くひ^くの^くあ^くら^くせ^くれ^く
 養^くま^くり^く嫁^くあ^くら^くむ^くせ^くめ^くあ^くら^くく^くあ^くら^くか^くら^くあ^くせ^くん^くが^く家^くあ^くら^くく^く
 多^くく^くあ^くら^く四^く人^くの^く口^くを^く糊^くし^くて^くあ^くら^くく^く已^くて^くあ^くら^くく^く得^くて^く
 か^く一^くハ^くあ^くら^くと^くい^くふ^く保^く平^くは^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^く
 さ^くて^くく^く右^く内^くハ^くが^く負^く責^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^く
 申^く途^くは^く女^く見^くを^くく^くあ^くら^くく^く人^く渠^く氏^く夫^くは^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^くあ^くら^くく^く

小説比翼文 2巻 208-142





を食く。つとを辱しよのあさあさう美娘をくおた
をうけらる。是より交を絶く永く胡越の人とならぬ

第二編

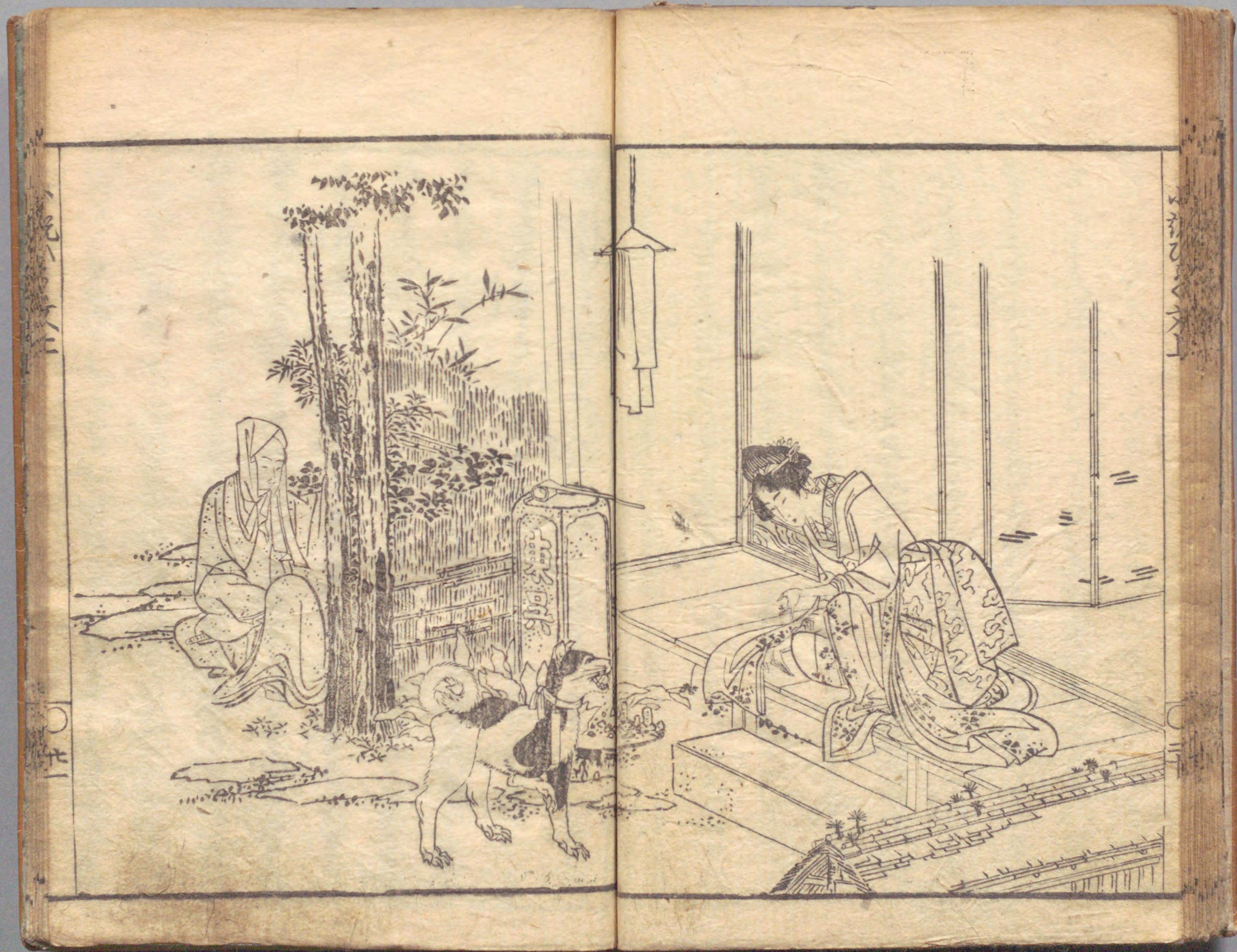
并 見恩を感じて情子不使も交
并 密契を典として右内縁を懐幸

光陰策のどく又梭のどく。権八已子十六才ありぬ。
その容貌の美身をいそ。節通もあまびがく。在るも
あまびがく。面ハ紅粉を結ききりて桃花の如く。腰ハ
羅綺もも申とぞ。あまびがく。嬋奔不似たり。かき少年を。
雛優中の女形といふものあもあまびがく。その男もあまびがく

免る人も多かりける。権八仍のどく。客路女子不傍拂
たりといふも。心あくまぐ。猛きく。男夫をもおそれ。奴
術ハ父が技をうけつ。金石を碎くの。後雨実よ
今の世の牛着凡ども。あまびがく。嫌あま今。最十六歳
あて。され又沈魚。魚屋の。あまびがく。見権八不考。尺
是より光。中。所助を夫が。助市。あまびがく。日とま。若
あまびがく。あまびがく。あまびがく。あまびがく。あまびがく。
何とぞ。硯子むら。あまびがく。あまびがく。あまびがく。あまびがく。
と源氏の古妻を。あまびがく。あまびがく。あまびがく。あまびがく。

小説ハ...

...





小説比翼文上

110

て。方おもくえがた宝きたども。あましく足下おあぐ
 一金子綱連のうへは美依守か。一ありづ。一とひり。
 鎌倉純子の中破さる袋さう。一腰さう早て。先
 を助を夫が茶よさうおたれば。助を夫とひがけざる由也。
 こま変あさまりたるを夢ゆけ。一家のうも。おれ
 おうぐんたけの姻つ死を後をあらむの悔力を死せふ。
 心の外にうらるぬえ来うが志れるとあもあさ小舟が
 浮死慮ありて金ををばあおせしるあま。いづで宝
 を助るづ死やとはい審あて腹は針あが死言るる
 を。右内をすも精しとらう。この夜光丸の先祖保
 昌うりうが家お傳されども足下も又成智丸の係嗣
 あしてたふ平井の遮流へ他人よ妻るたあさで足下
 よあづけおと死はうが家よあさあさ。物を得る難ふ
 正る死はうがあさあさ。あさあさ。あさあさ。あさあさ。助太
 夫のうら潜よまらび。あさあさ。替付あさあさ。あさあさ。あさあさ。
 一と。たれ宝奴をあらうけは。右内のあて平井村。酒ぬ
 ころ時天下昌平にぬ。一。文氏隆よ移れて。一。藝の
 士は。縁を得るをうらなまけは。奥羽の知別右内

を。右内をすも精しとらう。この夜光丸の先祖保
 昌うりうが家お傳されども足下も又成智丸の係嗣
 あしてたふ平井の遮流へ他人よ妻るたあさで足下
 よあづけおと死はうが家よあさあさ。物を得る難ふ
 正る死はうがあさあさ。あさあさ。あさあさ。あさあさ。助太
 夫のうら潜よまらび。あさあさ。替付あさあさ。あさあさ。あさあさ。
 一と。たれ宝奴をあらうけは。右内のあて平井村。酒ぬ
 ころ時天下昌平にぬ。一。文氏隆よ移れて。一。藝の
 士は。縁を得るをうらなまけは。奥羽の知別右内



小説比翼文上

七五

助を夫が撃斃し連れたることを知りて百五ふれし二人は
 ち刀合させし執事もあれ勝りたるは成るかつとて
 実檢の使志をさす越ゆる控へあれをせしむる大ま
 らびつが又助を夫をおよせあらんと懸ひるしとて
 けり右内も氣をたてんとけ付あつと。あつたの准
 備してち刀合の日を待居りし。夕助を夫志のび
 ち右内が絆末をくつく。おむけ交のち刀合の足
 下の務あらんと必せりこれの業もころく技も未熟
 又足下ハゴも長て技も鍛煉せり。されは足下
 ち彼處のめし不意のあら免はる。歎くづれいこれ合
 絆多れ門人あれはこそあつた世をさすは太刀合
 輒たるんや。弟子もさす。離るア。あれはこれ
 任るは。この地不足をさす人だ。さす方の恥辱は
 ふたあ。只小舟助市がさす。あつても後年。足下
 け子をせしむ。あつと。あつと。あつと。恩をいづれ
 あつらん。只あ。せむ。骨肉のほご。けり。明日
 のち刀合はあつ。あつ。あつ。あつ。夜光丸
 れ室をく。又新。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。

小説比翼文上

七五



子息持ハを中るふ。九男だすひらららんぬれ。
か致面ふせあるてきひむ。足下のおむぬえ而も
えづらけむと肉身の毫髪さそぎて新のごうを。
手て流を拭るぐらだるさあまかりけり。右内も
けりたてあひひまぐ。元来養をせむをな
まひむば彼一旦れ恩あはる固辞がく。儼然と
まぐらう。あひむげたてをてらるのま。が務づ死
あも定めがく。足下れ負あらんもいづらむ。務負の
時の運よこそよれ。その足下とらうああづたんと
答々れバ助を夫らうのらふ欺れ得たりよらとむ。
後争くつかあふうりち致。

第三編

平井が所闘剣法の夏
附 吾妻森三四白家仕事

かくて刃刀合の日あもあけむ右内助を夫め不意
いて仮屋小集とて務負ハ年の別と定むてま
長短四本の木刀をあらえ。むむあもあらう。想ド
と致を用了とあり。あ人もく。とまきさる。とらう
は息所不遅く。脱し時刻あもあけぬれ。実檢の役

九七





更ふありて人力のなるふ所まわらざる。とて、勝負を争
 めの一人利ありて一人必き懸ふかゝる由多不君子のありて
 ふとそらなく、おき違せんと欲して、まづ人を違はせけふ
 こそ本刀のおしこころも、又あり。その勝利ハ助を夫あり
 と、又も、あど、権ハハ、忽地、面を懸るがごとく、火をの如
 息をほとつた。かみ、あ、父の、何とや、た刀を、れ、き、ふ
 かつ、とて、再、度、の、勝負、ハ、重、あ、い、さ、る。これ、今、彼、雨、来、地
 ひ、ひ、父、より、り、き、勝負、を、決、ま、し、と、刀、引、控、て、ま、り
 び、か、と、て、や、ま、ま、く、権、ハ、注、が、あ、る、と、さ、ら、は、あ、ら、び、り、強、て
 ち、く、さ、る、あ、ら、び、親、子、の、愛、も、是、も、さ、ら、と、さ、る、声、も、あ、ら、び、制
 ち、と、バ、権、ハ、の、一、ま、ふ、ら、う、さ、る。拳、を、さ、ら、り、て、か、と、さ、る。
 ち、ま、ま、と、父、の、ち、刀、合、子、利、を、父、の、ま、ま、と、さ、る。助、を、夫、陸、奥
 ち、お、じ、い、ふ。助、市、も、承、知、り、た、れ、あ、ら、う、な、ん、と、さ、る。さ
 かの、と、さ、ら、あ、ら、う、さ、る。この、夕、艶、簡、志、と、さ、る。三四、自、分、が
 首、も、む、さ、ら、ひ、つ、け。助、市、が、か、さ、使、い、て、さ、ら、ら、り、を、さ、ら、た
 け、る。この、頂、上、の、ち、の、夏、迎、儀、置、き、と、さ、る。油、注、し、て、お、ま、ま
 ち、く、お、不、魅、ら、さ、た、れ、と、言、ひ、枝、を、さ、ら、え、さ、ら、い、ひ、傳、は、し、て、
 一、不、魅、を、呪、て、百、不、実、を、傳、は、し、と、さ、る。後、あ、ら、び、右、月、も、さ、ら

小説比翼文止

110





小説比翼文上





小説比翼文 2巻

110

かゝるに父はる月幾ひきり。木の着よかひの鉄筒を
さうく見せぬ。うち助市が回筒ありてさても鉄筒
おむくつたあちをたのむをさうして。又一葉の鉄尺を
とえしう。知らたてこれを元せむ。

むさづきありといひある。迎水の迹かたても世をさる
まると俊形朝長のおをりき。迎水といひ継とせむ。
父をたえき疑ひをさる。罪ある三四白を教せしを後

はも。彼を吾妻の森の辺に埋免志す。の石を幾
く物懸し用ひむ。今ぬく標板塚とくかの地あり

とや。この夜控八の隣へまゐりてけ付中
やくまうりけむ。右内ありしとも結せられ弱

皮の耐多く教せしを徳をさうし。小今亦主不
あるをさうして。ち陰徳をさうあり。り勉免を

是根を彼せむん。かか衆をれ後るん。汝ふく
鑑そ陰徳を結む。といひき。かの助市が短冊次

控八は通守のねり新まき。思ひ結るるをあれはとたを
結き妻とす。一也身志がうく。の鉄尺を思うり置

つがよみ程をも妹にかう。夢せむといひ控八も

小説比翼文 2巻

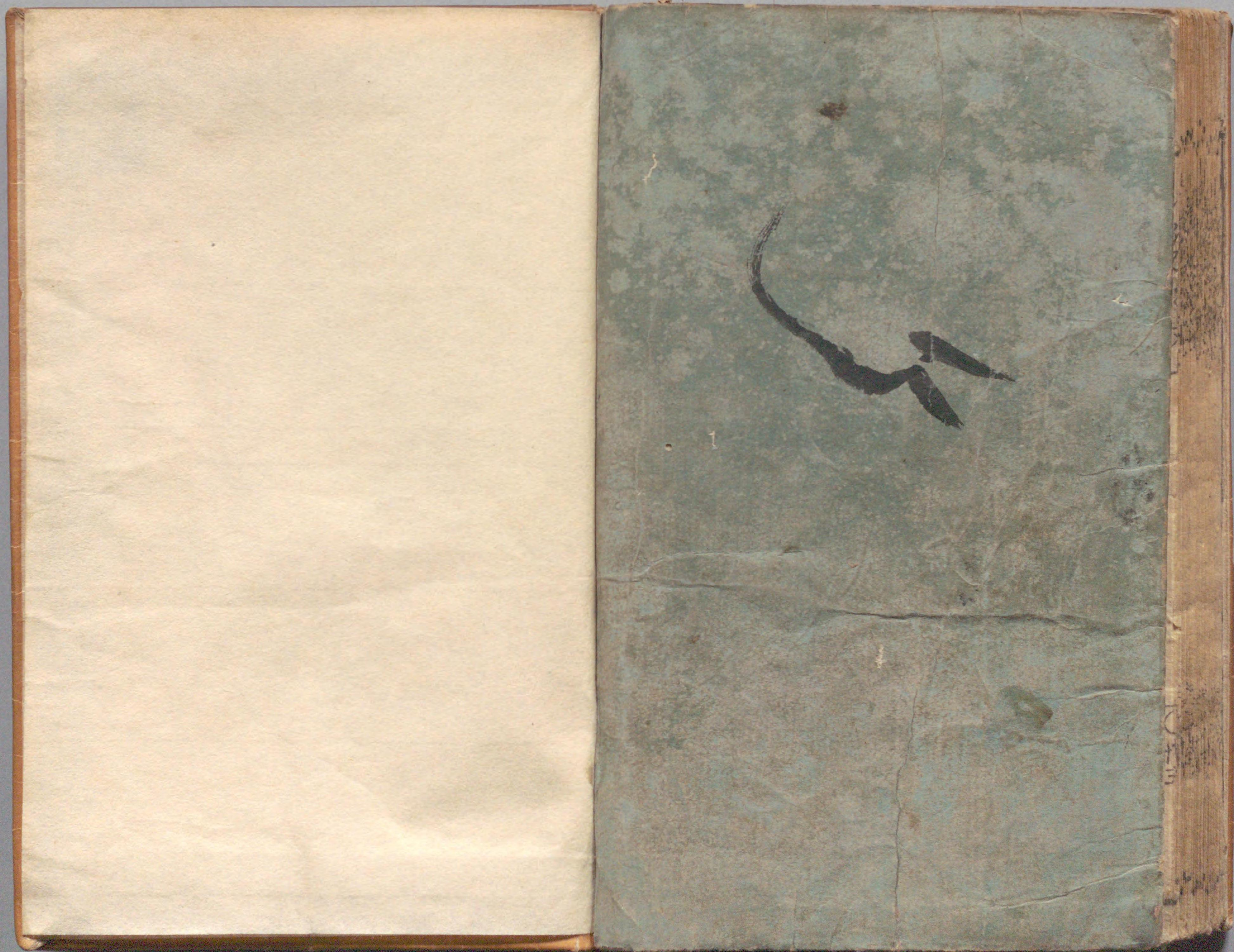
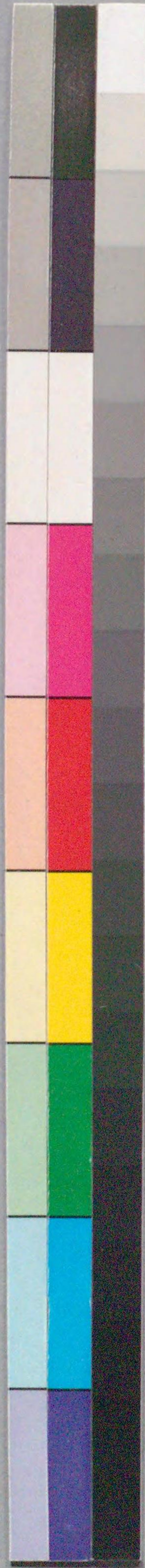
110

208
2
142

小説比翼文上巻 畢

父の恙をうたを感ず。且三四白が死をあらんと。
親子辞しつられて外房よひぬ。

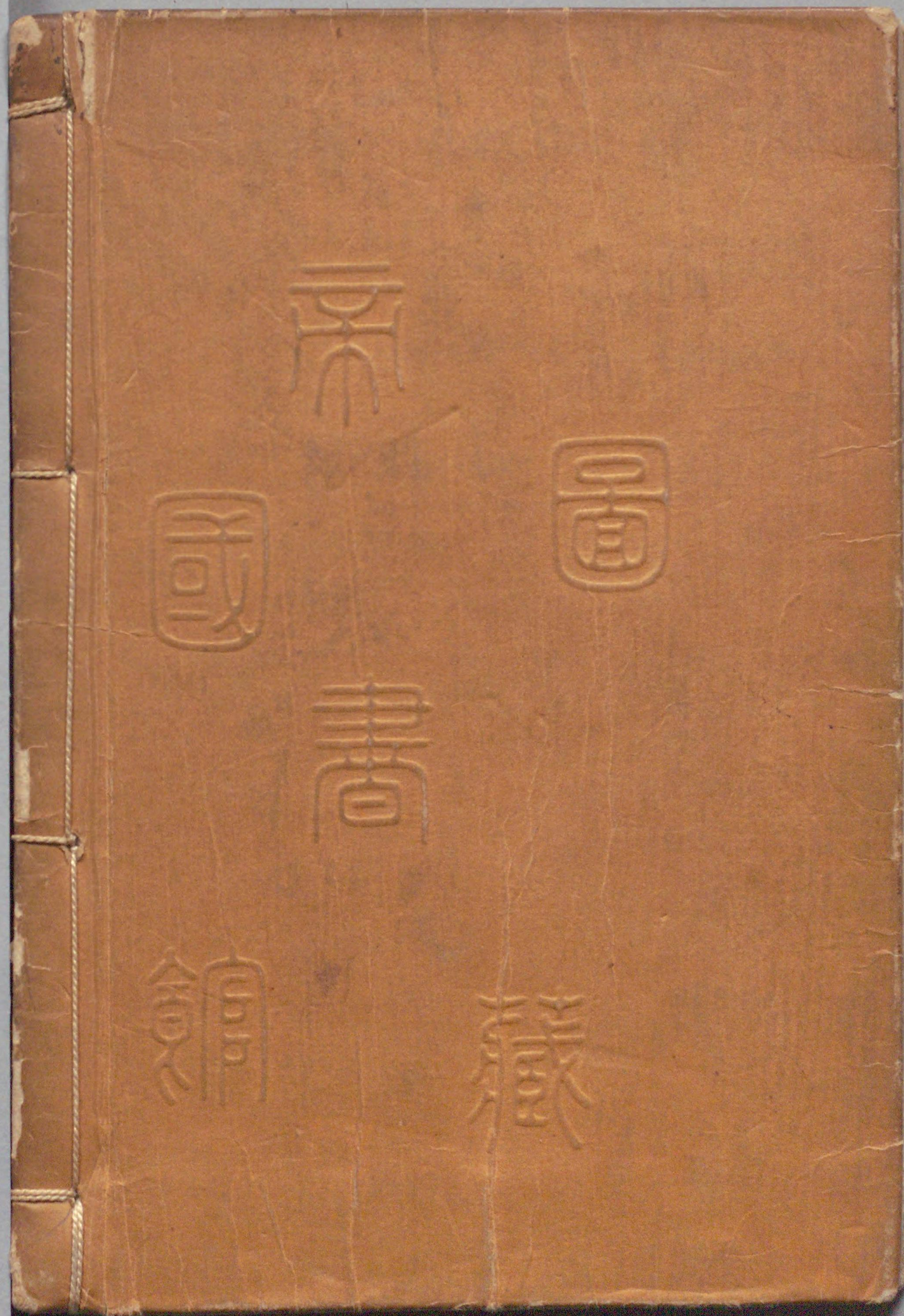
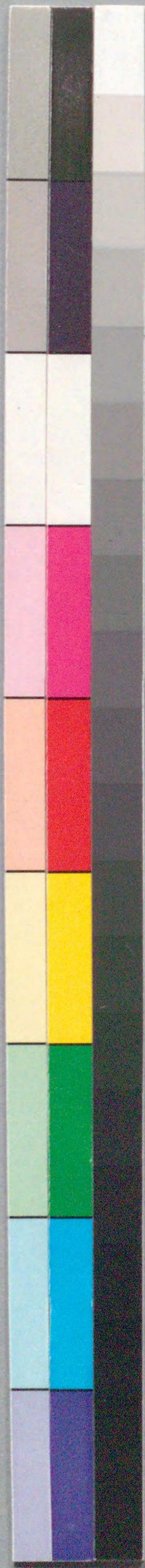




国立国会図書館 小説比翼文 2巻 208-142

ガラス使用





国立国会図書館 小説比翼文 2巻 208-142

ガラス使用